



學 穂

(ほかく)

令和 8 年度 広州日本人学校

学校だより No.4

令和 8 年 6 月 26 日

発行責任者 校長 大久 耕

児童生徒会からの提案 ～持参する水分について～

今年度の児童生徒会は、学校スローガン「拓く～新しい挑戦で未来の JSG の当たり前を今つくろう」のもと、これまでの「決まった活動をこなすだけ」を変えることをテーマに活動しています。

その一環として、まずは以前から多くの意見が寄せられていた「無糖のお茶を持参したい」という声について、役員で話し合いを重ねました。最終的に、衛生面での課題となる虫が集まる原因は砂糖を含む飲料であり、無糖のお茶は問題がないこと、また麦茶などは熱中症対策としても有効であることを役員間で共有し、校長先生・教頭先生に提案を行いました。

今回、持参が認められたことに、役員一同大きな達成感を感じています。これからも児童生徒の声を大切に、より良い学校づくりに挑戦していきます。

児童生徒会長 中学部 3 年



先日、児童生徒会の会長・副会長 3 名が校長室を訪れました。かねてから話し合いを重ねてきた持参する水筒の中身について、意見をまとめたので提案をしたいとのことでした。概要については、上記のとおりです。提案を受け、職員で内容の確認を行い、実施を許可いたしました。

今回の提案において校長として喜ばしく思ったことは、単に持参する水分の範囲を拡大したいという希望を伝えてきたことではありません。竹谷さんが「自分たちには自分たちで決めたルールを管理していく力があるということをしっかりと示していきたい」と話してくれたように、自分たちで管理・実証を行っていくという提案に対する責任についても示したこと、自分たちで学校をよりよくしていきたいという強い思いが感じられたことです。

児童生徒会役員は、今後さらに児童生徒の声を集めて、学校をよくするための提案を行っていきたいと考えているようです。どのような提案がなされるのか、とても楽しみにしています。

私たち教職員一同、子供たちを信じて、子供たちとしっかりと話し合いながら「未来につながる広州日本人学校」を創造していきたいと思っています。



【中学部】職場体験学習（6月24日～25日）

今年度も中学部 3 年生が企業を訪問し、仕事の様子を見せていただいたり、実際に仕事を体験したりしながら学ぶ「職場体験学習」を行いました。

商品の販売や組立て、接客などの業務を体験しながら、「働くこと」への学びを深める貴重な経験となりました。

ご協力いただきました日本航空 (JAL) 様、広州ヤクルト様、広州精工技術 (SEIKO) 様、ありがとうございました。

【小学部】修学旅行 ～西安市～（6月10日～12日）

6月10日～12日、2泊3日で小学部6年生の修学旅行を実施しました。天候にも恵まれ、子供たちは充実した学習をすることができました。

兵馬俑博物館では、兵馬俑の実物を見学し、教科書からでは分からない大きさ、迫力、数の多さなどに圧倒されました。その他にも、西安の城壁、シルクロードの歴史を感じられるショーなど、一つ一つのスケールの大きさに、中国の歴史と伝統を肌で感じる事ができました。

また、日頃から一緒に活動している子どもたちですが、長い時間を共に過ごすことで、これまでとは違う新たな面の発見もあり、友情も一層深まったようです。



秦始皇兵馬俑博物館



三蔵法師ゆかりの大雁塔（大慈恩寺）



西安城壁

【中学部】宿泊学習 ～深圳市～（6月17日～18日）

6月17日～18日、1泊2日で、中学部1年生の宿泊学習を実施しました。

中学部の宿泊学習では、「中国の今」に触れること、同じ中国内に住む日本人と触れ合うことをとおして、これからの世界の変容や自分自身を見つめてみることなどをねらいとしています。

深圳日本人学校との交流会は、両校の生徒ともに緊張した面持ちでスタートしました。しかし、お互いの発表や質疑応答を進める中で次第に打ち解けてきて、終わる頃にはすっかり旧知の仲のような雰囲気になりました。

BTETでは、CTOの亀山様から「自ら目標を立て、それを達成することで勝ち癖をつける『実現力』を大事にしてほしい」と力強く熱いお話をいただきました。話を聞く生徒の表情から、心の深いところまで届いていることが感じられました。



深圳日本人学校



DJI（ドローンからの空撮）



BTET

学校長日記

先日、職場体験学習から戻った中学部3年生の教室に、感想を聞いてみようかと足を運びました。

するとある生徒が、自ら訪問先企業での学びについて話してくれました。その内容は、製品やサービスのことではなく、体験をとおして触れた企業の理念や働くことへの誇りといったことでした。中でも、さまざまな競争がある中で「選ばれるために、どのように会社や製品の価値を高めていくのか」という話は、その生徒にとって大きな学びだったようです。充実した表情で話をする姿からは、自分を磨き、自分の価値を高めていこうという強い決意が感じられました。